

教科の構造に基づいた小学校社会科授業研究

—知識の構造図と概念的枠組みを用いて—

川口 広美・城戸 ナツミ*・近藤 秀樹*・尾藤 郁哉*・高 錦婷*・福元 正和*・
山口 安司*・兒玉 泰輔*・茂松 郁弥*・山本 稜*・吉川 友則*・神野 幸隆**・
鉦 悠介**・池野 範男***

(2017年12月21日受理)

The method of lesson study based on the structure of the subject : the case of primary social studies classroom

Hiromi KAWAGUCHI, Natsumi KIDO, Hideki KONDO, Fumiya BITO, Jinting GAO, Masakazu FUKUMOTO, Yasuji YAMAGUCHI, Taisuke KODAMA, Fumiya SHIGEMATSU, Ryo YAMAMOTO, Tomonori YOSHIKAWA, Yukitaka KAMINO, Yusuke TATARA and Norio IKENO

This study presents the case study of the lesson study in a primary social studies classroom in Japan. The result indicates to propose a new method of social studies lesson study. While previous methods tended to pay less attention to the context of school and children because of the focus of generalization, this study highlights the reality of diverse children in a classroom settings. Throughout the study, we compared the two items: The structure of the subject, namely, triangle relation of goals, contents, and methods and learner 's learning structure. Comparing the two items, we could see the effect of the process of teaching and learning on the children. It means that we can propose the new method by focusing on the reality of the classroom.

Key words : lesson study, social studies, primary school, sturcture of subject

0. 研究目的

本研究の目的は、小学校社会科授業過程における子どもの知識形成および変容過程を、目標—内容—方法という教科の構造を用いて検討し、それを通して社会科授業改善研究の新たな方法論を提案することである。

以下では、次のような構成で論じる。まず従来の社会科授業研究方法を取り上げ、どこに課題があるかを明らかにする。次に、提案する新しい授業改善研究方法を示した上で、小学校社会科5年の「情報産業と私たちの暮らし」の授業を取り上げ、実際の検討を行う。最終的には、本研究の特質を述べた後に、総括を行いたい。

1. 先行授業研究方法の課題

(1) 従来の社会科授業研究とその課題

社会科授業研究は1960年代に始まり、今日にいたるまで多様な成果が発表されてきた。多様な授業研究をその目的・方法から検討すると、大きく20世紀型と21世紀型にその性質を区分することができるだろう(梅津, 2013; 全国社会科教育学会編, 2011)。

20世紀型授業研究は、主に社会科教育研究者が主導し、社会科授業の客観性・一般性と批判可能性を高め普遍的な授業理論を確立することを目的にした。どの教師が実践しても一定程度成果を残せることを目指した教授書の開発も一例としてあげられる。(例えば、森分, 1978; 1982など)このように20世紀の社会科授業研究は、研究の普

*広島大学大学院教育学研究科博士課程前期, ** 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期, ***広島大学名誉教授, 日本体育大学

遍化を優先し、それぞれの地域や学校の文脈といった授業のリアリティにもとづくことは少なかった。

しかし、21世紀に入ると、子どもや学校の多様化、教育政策の変化（学習指導要領の大綱化）といった背景もあり、学校や地域の文脈を踏まえ、授業のリアリティを重視した授業分析・評価・改善が重視されるようになった。これが21世紀型である。

梅津・原田（2015）らがまとめた、PDCAサイクルに着目した社会科授業研究がその例としてあげられる。PDCAサイクルは、はじめに授業理論を構築し、その理論に基づいて授業計画を開発し、そして子どもの実態を踏まえて実践し、評価する。この授業研究は、授業理論と実践の事実との結びつきの説明において、学校教育・教員・子どもの置かれた社会状況、授業実践の社会的文化的文脈、子どもの認知発達の特性など、授業内に埋め込まれた文脈を加味するという特質がある。

しかし、PDCAはあくまで授業者が意識的に理論化したものを中心に分析を行うがゆえに、①無意識的にとった理論が見えにくくなること、②子どもの変容過程ではなく、結果のみに注目してしまうこと、といった課題がある。

これに対し本稿で提案する研究方法では、授業自体の実態を詳細に加味することを志向する。即ち、①授業を計画・実施した教師の持つ意識的のみならず無意識的な授業理論も含めて検討すること、②結果ではなく、あくまで授業過程における子どもの変容から実態を探求する。授業は目の前の具体的状況に即して行われる。このような研究方法をとることで多様な子どもたちの実態に合ったリアリティのある社会科授業研究が可能になると考える。

(2) 小学校社会科授業研究の課題

授業のあり方について、初等と中等で比較してみると、初等は中等に比べ、子どもの思考や発想で授業が大きく左右されるという特質がある。

そのため、授業研究方法においても、学習者の学びの姿、特に子どもの学びの形成と変容を考察する研究とその方法が多く開発されてきた（關，2012）。例えば、關（2005）は、子どもの発言をウェビングマップ法で整理し、子どもの認識変容を明らかにする研究を行ってきたし、服部（2017）など社会科の初志をつらぬく会による授業記録や座席表指導案等で子ども一人一人のすがたを追う

研究などがある。

しかし、これらの研究は、子どもあるいは子どもたちの変容過程の導出が中心とされ、実際の授業構成と照らし、その過程のどこに課題があるか、授業構成や構造の観点から、授業の評価をすることはできていなかった。小学校社会科授業研究全体の課題としては、子どもの変容自体は注目されてきたものの、それと授業過程との関係が見えにくい点が挙げられる。

このような課題に取り組んだ研究として、池野ら（2008）が挙げられる。この研究は子どもの学習活動を変容過程として、それを漸進的段階過程に再構成し、概念的枠組み理論における代替的枠組みを用い子どもたちの学習過程とその結果を評価し判断しようとした。この研究は、授業において教師が目指す子どもの変容のすがたを、その設定の根拠から検討するには至っていないという課題を持っているが、「知識の構造図」と「概念的枠組み」を用いた授業研究として注目される。

本稿は池野ら（2008）の研究を発展させ、社会科授業研究を授業の担い手、とくに学習者に着目した授業改善研究方法として精緻化を図るものとした。

2. 社会科授業研究の提案

本研究では、①授業のリアリティを重視した授業改善を目指し、②教師がどのような授業理論を無意識的に保持し、授業のゲートキーピングを行おうとしたのかを分析・評価し改善する新たな社会科授業改善研究方法論を提案する。その際の分析視点として、「教科の構造」を用いる（池野ら，2016）。

この教科の構造は、単元、授業、授業の各パートにある目標—内容—方法の三角形の構造のことである。授業の各パートに存在する目標—内容—方法の連続体として授業が構成され、その授業もまたそれぞれ目標—内容—方法をもち、さらにその連続体として単元が構成されているのである。この三角構造を用い、1単元、1授業時間をこの「教科の構造」の集合体として構成し、その構造的・整合性・正当性を吟味検討することになる。

授業研究の過程は4ステップ6活動に組織される。分析には、目標—内容—方法の「教科の構造」と、授業記録のプロトコルを用いる。

図1を基に説明する。

ステップ1（活動①）では、対象授業の基盤になったであろう学習指導要領や教科書（以下、教

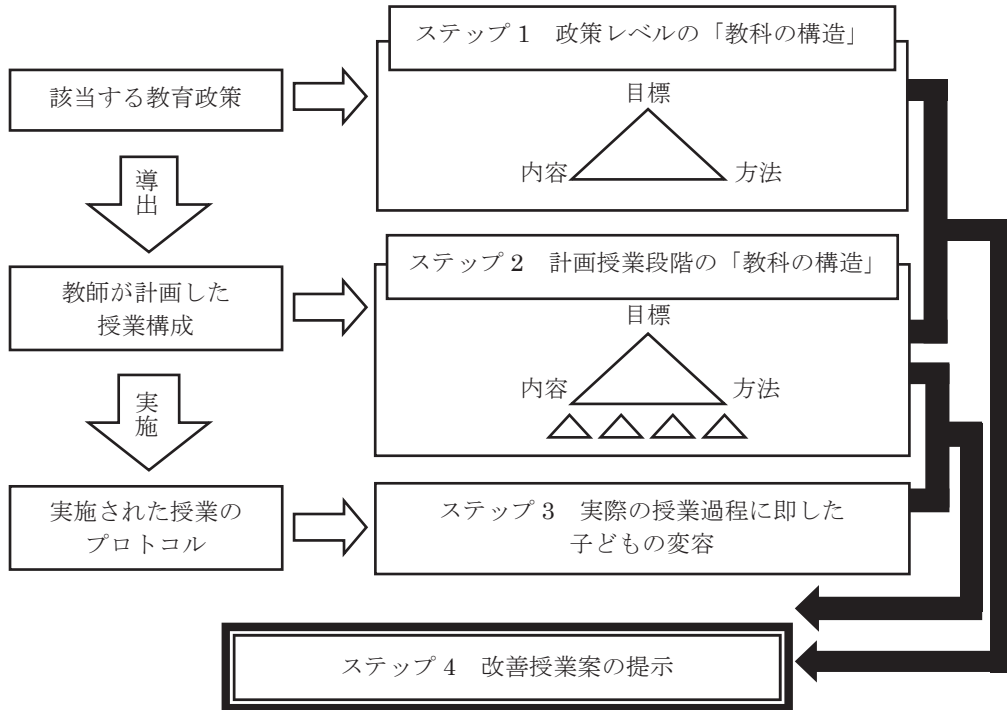


図1 提案する社会科授業改善研究方法論（著者作成）

育政策とする)で想定されている授業構成を「教科の構造」に表し分析する。教師は、多くの場合日々の授業の実施にあたり教育政策に依拠しているからである。

ステップ2では、計画段階の対象授業を「教科の構造」に表し、教育政策レベルの「教科の構造」と比較・分析する。ここでは三つの活動を行う。活動②は対象授業の位置づけの提示、活動③において単元、活動④において一時間という単位の授業を対象とした分析である。これらに基づき、教師により行われたゲートキーピングや無意識的に保持された授業理論はどのようなものか、それは教育政策にどのように導かれたのかを明らかにし、授業計画段階での整合性や妥当性を検討する。今回は、概念的枠組み理論と知識の構造図を用いて教師の無意識的な授業理論を明らかにしている。

ステップ3（活動⑤）では、対象授業のプロトコルを作成し、実際の授業での子どもの（知識・スキル・態度の）変容過程と計画段階の授業構成を比較分析する。これにより、その変容には授業の何がどのように影響を及ぼしたかをその過程に即し明らかにする。これは、それぞれ授業から単元の構造を見る、単元から政策が示した教科の構造を見直すことにもなる。

ステップ4（活動⑥）では、導き出された課題に対する改善授業案を提示する。

以上の4ステップ6活動により、授業のリアリティ意識的・無意識的な教師の理論と子どもの実態一を踏まえた授業改善研究が可能になる。

3. 授業改善研究の実際

前節で述べた4ステップ6活動の社会科授業改善研究に沿って改善研究の実際を対象とした授業、単元「情報産業とわたしたちの暮らし—情報を創る！情報を生かせ！—」（全9時間）の中の8時間目の授業研究を行う。

(1)ステップ1 活動①: 政策で想定されている授業構成

まず、学習指導要領に基づいて作成されている教科書の分析を行うことで、政策段階で想定されている学習内容を確定させたい。

本時の学習内容が教科書において該当する部分は、『新しい社会5下』（東京書籍、平成23年度出版）における、小単元「情報産業と私たちの暮らし」の補助教材「新聞社の働き」である（pp. 80-81）。表1は、教科書記述から、主発問・学習活動・教科書記述の要約の各要素を著者が抽出し

表 1 補助教材「新聞社の働き」の構成

主発問	◇学習活動 ・教科書記述の要約	内容と役割	
「新聞社の仕事は、わたしたちの社会のなかでどのような役わりを果たしているのでしょうか。」(調べる)	◇広島市にある新聞社の地域貢献活動について知る。 ・広島市で行われる「ひろしまフラワーフェスティバル」などをはじめとする行事に協力・運営している ・平和に関する記事に力を入れたり戦争や平和についての過去の記事を公開したりすることで、市民の平和への取り組みをささえている ・ <u>広島市にある新聞社の部谷さんの話(新聞社の使命)</u> ...	情報産業の 思いと情報 伝達以外の 役割	情報産業自 体の国民生 活とのかか わりについ ての調査

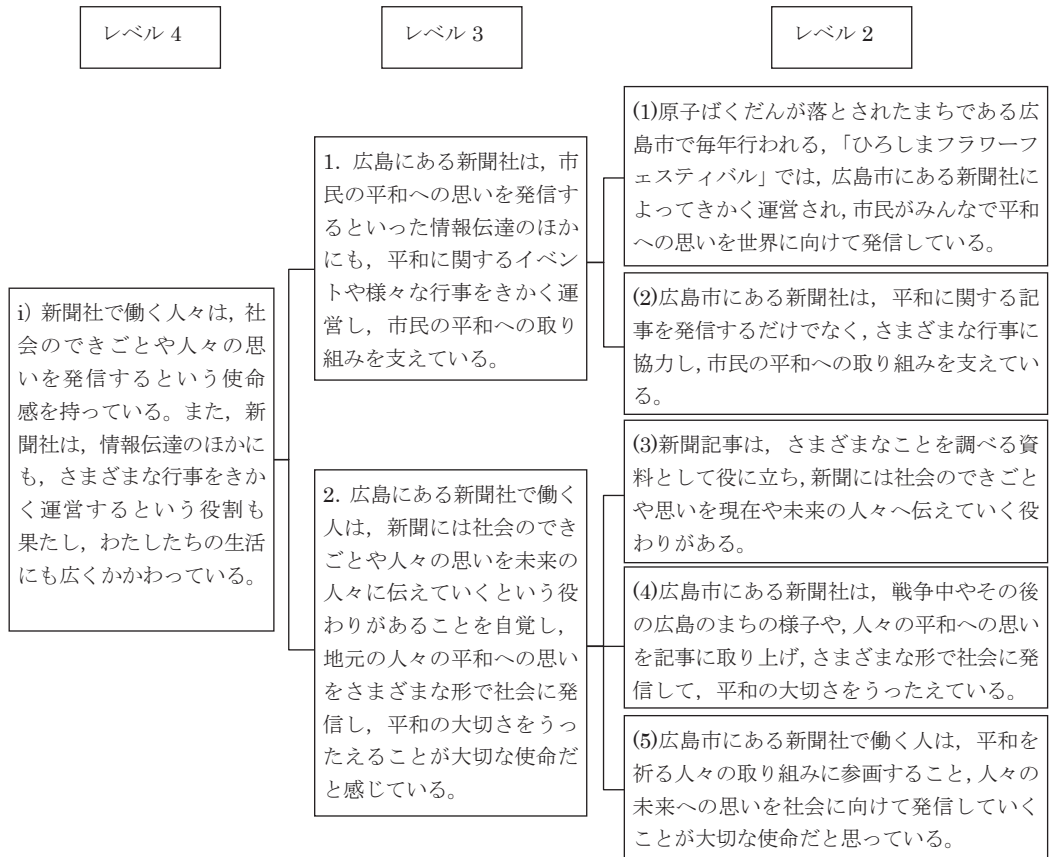


図 2 教科書の知識の構造図

(注記：1 『新しい社会 5下』 pp. 80-81 より著者作成

2 レベル 1 の知識は数が膨大になるため、紙幅の都合で割愛した。)

で作成したものである。またこれらの各要素をもとに、想定されている内容と、該当ページが単元内で果たすと思われる役割を抽出した。

教科書及び表1から読み取れる学習課題は、「わたしたちの社会の中で、新聞社の仕事果たす役割」である (p. 80 より要約)。また、教科書記述をもとに作成した知識の構造図 (森分, 1987) が図2である。

この知識の構造図から、獲得させたい最も高次の知識は、新聞社の二つの役割 (情報発信・地域貢献) であることがわかる。これを獲得させるために、中国新聞社を事例に、ニュース記事や戦時中の様子についての記事による情報発信をしていることを理解させようとしている。そして、フラワーフェスティバルをはじめとする平和行事を中国新聞社が企画運営していることも理解させることで、新聞社の二つの役割を理解させる構成になっている。

(2) ステップ2活動②：対象授業の位置づけ

本研究では、2015年10月に広島県内の小学校第5学年において、樋川尚教諭によって研究授業として実施された授業を取り上げる。本授業は、

同教諭によって実施された単元「情報産業とわたしたちの暮らし—情報を創る! 情報を生かせ!—」(全9時間)の中の8時間目に該当するものである。本単元は、小学校社会科学習指導要領(平成20年3月告示)第5学年(4)のAの内容に基づいて設定されたものである。

(3) ステップ2活動③：単元構造の分析

本単元の構成を表2に示す。表2の横列は、目標・学習過程・構成・授業者の構造・構造分析からなっている。行は上から下にかけて単元で扱われる順序に従って配列されている。目標・学習過程・授業者の構造については、学習指導案より抜粋した。構成については、学習指導案より要素を抽出し、「教科の構造」の三角形に従い作成した(左上が「内容」、右上が「方法」、下が「目標」)。

また、学習指導案には本単元の目標として、以下の2つがあげられている。

○新聞などの情報産業が国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや、情報の有効な活用が大切であることを理解するとともに、情報産業の発展に関心をもち、情

表2 本単元の構成と構造

目標	学習過程	構成	授業者の構造	構造分析	
○目標1:身の回りにあるメディアに関心をもち、自分の生活とのかかわりでそれぞれのメディアの特徴を調べ、話し合い、学習問題を立てる。	1身の回りの情報とメディア	メディアの特徴 調べる 話し合う 目標1	社会認識を育てる場 であう	学習課題	
○目標2:新聞には、多種多様な情報が掲載されていることとらえ、新聞はどのような役割を果たしているのか学習計画を考える。	2新聞の役割	新聞の情報の多様性 予想 学習計画設計 目標2	社会認識を育てる場 ふかめる	仮説	
○目標3:新聞は、多種多様な情報を取材・編集などの作業を経て作られていることを調べる。	3新聞の作成過程	新聞の作られ方 資料読解 目標3		情報整理重視	
○目標4:わたしたちは、生活の中で新聞を活用し、かかわっていることを理解している。	4新聞の活用場面	新聞の活用場面 調査 目標4		検証	言語活動重視
○目標5:情報を送る側と情報を受け取る側、それぞれが気を付けることを理解する。	5新聞記事の違い	情報の差異性 読み手の態度 資料比較 話し合う 目標5			
○目標6:被曝3日後の8月9日に新聞が発行された様子調べ、中国新聞社の人々の思いを考えることができる。	6被曝と中国新聞社	新聞社の人々の思い 資料読解 話し合う 目標6		実践的な力を育てる場	まとめ
○目標7:広島土砂災害の避難所で発行されていた被災者向けの壁新聞が果たした役割について考え、まとめる。	7避難所の壁新聞の役割	壁新聞(非営利)の役割 資料読解 話し合う 目標7			
○目標8:新聞社の企画運営事業は、地域の特色の発信や発展に貢献していることを考え、話し合うことができる。	8新聞社の企画運営事業	新聞社の企画運営事業 資料読解 話し合う 目標8			
○目標9:既習内容を生かし、新聞のよさや新聞とのつきあい方を、自分とのかかわりで考え、「まとめ新聞」に表現することができる。	9新聞と自分のかかわり	新聞と自分のかかわり 新聞作成 目標9			

- (注記: 1 目標・学習過程・授業者の構造は学習指導案より抜粋。
 2 構成は「教科の構造」に基づき、学習指導案より要素を抽出。
 3 構造分析は、著者が目標や学習過程、授業者の構造から推測したものである。)

表3 本時の構成と構造

目標	学習過程	構成	構造	構造分析
○目標1: 既習事項から、新聞のよさ、新聞記者の思いを想起させる。	1 新聞についての振り返り	新聞の働き 問答 目標1	課題を見つける	活用①
○目標2: 新聞社がなぜ企画運営事業をしているのか疑問を持たせる。	2 学習課題の確認	新聞社の企画運営 記事の読み取り 目標2		
○目標3: 身近な企画運営事業の例から、学習課題に対する予想を立てさせる。	3 学習課題に対する予想	既知知識 予想 目標3	予想する	
○目標4: 新聞社が多様な企画運営事業をしているという事実を資料から読み取らせる。	4 調べる①	多様な 資料読解・意見交換 目標4	予想の検証をする	探究
○目標5: 企画運営事業が私たちの生活に与える影響について考えさせ、話し合わせる。	5 調べる②	生活への影響 資料読解・意見交換 目標5		
○目標6 (本時の目標): 「新聞は、情報発信していると同時に、地域に密着し、地域の元気、発展、楽しみ等を作り出していることを企画運営事業をしている新聞社の思いと自分とのかかわりで考え、表現させる」	6 学習課題に対するまとめ	地域の情報発信・発展 記述 目標6	課題に解答する	活用②

- (注記: 1 目標・学習過程は学習指導案より抜粋。
 2 構成は「教科の構造」に基づき、学習指導案より要素を抽出。
 3 構造は、目標・学習過程・構成から著者が推定したものである。
 4 構造分析は、著者が構造をもとに小学校社会科授業理論で該当するものを推定した。)

報を有効に活用しようとする。
 ○生活の中の新聞から学習問題を見出し、各種の資料を活用して読み取ったことを、ノートなどにまとめるとともに、新聞と国民生活とを関連付けて新聞社（発信者）の意図や責任について思考・判断したことを適切に表現する。

「教科の構造」を踏まえ、本単元の各部分の構成を整理し、本単元の構造を分析したものが、表2の最右列「構造分析」である。「構造分析」は初めに学習課題を設定し、子どもが仮説を立て、情報整理や言語活動を行いながら検証し、課題に答えていくプロセスになっていることを示している。この点から、本授業は探究型の単元構造(岩田、2009)になっていると考えることができる。

(4)ステップ2 活動④: 授業構造の分析

①学習内容

新聞の働きについての既習事項（速く、正確に、地域のニーズに合わせて、送り手の責任、受け手の判断、大きな影響を与える）とともに、これを越える新聞社の人々の願いを知り、新聞社は多様な企画運営事業を行っていることをわかること

によって、地域の特徴の発信や発展に尽力していることを理解することが、本時で目指されている学習内容である。

②目標・ねらい

学習指導案に示されている本時の目標は、以下の通りである。

「新聞社が企画運営している300以上のイベントについて調べる活動を通して、新聞社は地域の特徴の発信や地域に貢献していることを考え、話し合うことができる。」

これは、2段階に分けられる。第1段階は、新聞社が企画運営事業を多く行っていることを理解させる。第2段階はなぜ新聞社が企画運営事業をしているのかを子どもたちに考えさせ、考えたことをクラスで話し合わせるということである。

③本時案構成・分析

本時の構成・構造を上表3に示す。表3も、表2と同様の方法で作成した。

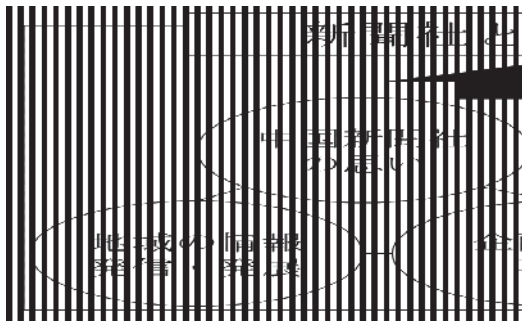


図3 教師の概念的枠組み

(注記：著者が本時の学習指導案より要素を抽出し推定したものである。)

本時の学習プロセスは、はじめに、学習課題を設定し、子どもたちが課題に対して予想し(仮説を立て)、その予想について検証していき、最後にまとめとして学習課題に答えるというものである。これは、小単元の構成と類似していると考えられる。したがって、本時は、「習得・活用・探究型」の授業構造になっているといえる。本時は、課題発見・学習課題に対しての予想から始まっている(表3における学習過程1~3)ことから、「習得・活用・探究」の授業構成理論(習得→活用①→探究→活用②：岩田, 2009)における「活用①」から始まっていると考えられる。これは、本時の導入部で前時までの復習を行っていることから、「習得」のプロセスは前時までの内容が該当すると考えられるためである。

そして、学習過程4~5では、資料を調べ、その資料を基に考えさせ、学習課題を子どもたちに話し合わせることで、新聞社と企画運営事業のつながりについての説明的知識を形成する「探究」のプロセスになっている。そして、終結部(学習過程6)で自分とのかかわりで考えさせていることから「活用②」のプロセスになっていると考えられる。

以上を踏まえて、本時を行うにあたって教師が想定していた概念的枠組みを左の図3に表した。①中国新聞社の思い、②地域の情報発信・発展を目指すこと、③子どもの日常生活とかかわりのある企画運営事業、の3点を結び付けて理解することで、新聞社が企画運営事業の関係についての説明的知識を形成させようとしていると推定できるためである。

(5) ステップ3 活動⑤：実際の子どもの変容

本項では、実際に授業を学習した子どもたちが、どのように知識・思考を形成・変容させたのか、教師が用意していた概念的枠組みをどのくらい習得できたのかを分析するために、本時におけるプロトコルを作成し、教師と子どもたちの発言を追跡した。このプロトコルに基づいて、まずは知識の構造図を作成した(図4)。図4は授業において子どもたちが総体として獲得・形成した知識の構造図である。図4から、本授業は、既習事項を生かして、より発展的な内容を学習させることをねらいとし、子どもたちが学習としてそれを形成し

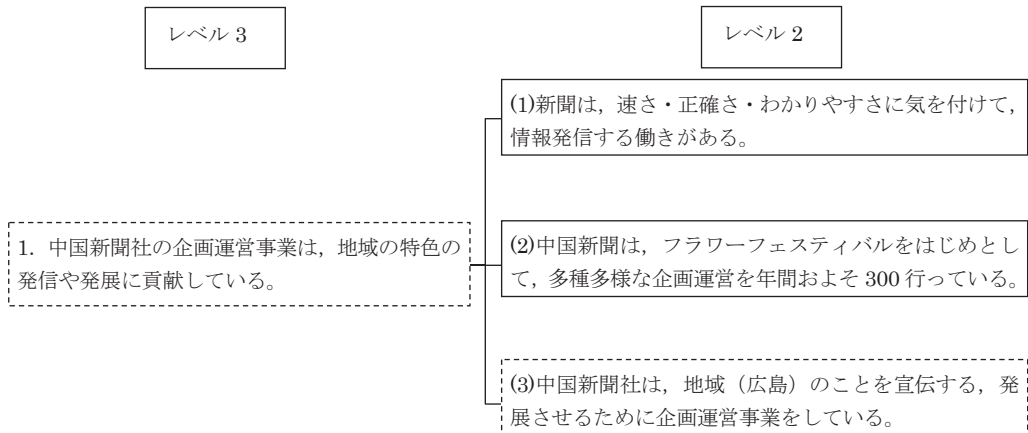


図4 本時の知識の構造図

(注記：1 本時のプロトコルをもとに、著者が要素を抽出して作成した。
2 実線部は実際に授業で見取れるもの、破線部は著者が推定するものを表している。
3 紙幅の都合でレベル1の知識は割愛する。)

たといえる。また、「習得・活用・探究」のプロセスをとることによって、子どもたちの既知知識を土台に、より高次の知識へと発展させようとしていた。

しかし、実際にはレベル2の知識に留まり、中国新聞社の内容に終始している。また、目標に掲げられている「国民生活とのかかわり」が取り扱われていないため、教師が想定した概念的枠組みを子どもが形成していると推定することは難しい。

さらに、個別の子どもたちについても検討した。特定の子ども（Y君）に着目してみると、Y君は予想の段階で学習課題に対して「町おこしのため」と発言している。しかし、Y君は検証の段階を経て、学習課題に対する答えを求められたとき、「さっきも言ったんだけど、・・（中略）・・町おこしになります。」と述べており、授業の前半と後半で知識が変容していないことも見て取ることができる。

本授業に関してステップ1～3を経て検討した結果、以下の2点を課題として示したい。

第1は、子どもの知識を高次のものへと変容させていくこと。第2に、国民（子どもの）生活とのかかわりを意識させることである。

本授業でこれらの課題が生じた大きな原因として、「探究」のプロセスが、子どもとあまりかかわりのない資料を用い、レベル3を取り扱う適切な学習活動がなく、教師主導で提示してしまったことがあげられるのではないかと考える。したがって、子どもたちが主体的に情報収集し、知識を高

次のものへと変容させていくことのできる授業構造へと授業を改善することを提案したい。

(6) ステップ4活動⑥：改善案

改善案の作成の仕方は多様である。本授業は知識の構造図を用いた習得－活用－探究の探究型授業を作るという授業の基本構造をもっている。この基本構造に基づいて改善案を作成することにした。

ステップ3で明らかにした2つの課題を克服するには、まず、子どもの変容が見て取れない原因を作り出したと思われるMQに対応するMAを以下のように改善したい。

「新聞社が企画運営事業をしているのは、地域の特色の発信や地域の発展に貢献するためである、ということ、地方新聞社の社員の視点から考え、調査し、話し合うことができる。」

このようにMAを設定し、全国紙との違いに着目させ、MQを、地方新聞社がその独自性を確保するためにどうすればよいのかにする。このMQを考え、資料等で調査することによって企画運営事業の存在を知る方が、思考が深化するのではないかと考える。ここで大切なことは、子どもたちが新聞社社員の立場になって考えることである。こうすることによって、子どもたちの主体的な学びを促進することができ、おのずと高次の知識へ

表4 本時の改善案

目標	学習過程	構成	構造				
○目標1：既習事項と全国紙と地方紙の比較により、国民の情報ニーズにこたえる新聞の役割を読み取らせる。	1 新聞の役割	<table border="1"> <tr> <td>情報ニーズと新聞</td> <td>記事比較</td> </tr> <tr> <td colspan="2">目標1</td> </tr> </table>	情報ニーズと新聞	記事比較	目標1		問題発見
情報ニーズと新聞	記事比較						
目標1							
○目標2：なぜ、全国紙と地方紙があるのか疑問を持たせ、地方紙に特有の役割は何か予想させる。	2 地方紙の役割	<table border="1"> <tr> <td>地方紙の役割</td> <td>予想</td> </tr> <tr> <td colspan="2">目標2</td> </tr> </table>	地方紙の役割	予想	目標2		解決計画
地方紙の役割	予想						
目標2							
○目標3：地方新聞社は企画運営事業を行い、地域の情報発信や発展に貢献しようとしていることを資料から読み取らせる。	3 地方新聞社の企画運営事業	<table border="1"> <tr> <td>企画運営事業</td> <td>資料読解</td> </tr> <tr> <td colspan="2">目標3</td> </tr> </table>	企画運営事業	資料読解	目標3		問題解決
企画運営事業	資料読解						
目標3							
○目標4：資料から読み取った内容をクラス討議（集団思考）により話し合わせ、意見を共有させる。	4 集団思考により、自身の思考を省察	<table border="1"> <tr> <td>企画運営事業の意図</td> <td>集団思考</td> </tr> <tr> <td colspan="2">目標4</td> </tr> </table>	企画運営事業の意図	集団思考	目標4		共有化
企画運営事業の意図	集団思考						
目標4							
○目標5：クラス討議を踏まえて、本時のMAをノートにまとめ、記述させる。 (MA：地方新聞社は、地域の情報を発信、発展に貢献を意図し、企画運営事業を行っている。)	5 ノート記述によるまとめ	<table border="1"> <tr> <td>地域の情報発信・発展</td> <td>ノート記述</td> </tr> <tr> <td colspan="2">目標5</td> </tr> </table>	地域の情報発信・発展	ノート記述	目標5		深化
地域の情報発信・発展	ノート記述						
目標5							

(注記：表3をもとに、著者が、構造が問題解決型になるように要素を抽出、追加して作成した。)

と変容していくと期待される。また、新聞社側の視点に立って企画運営事業を考えることで、国民生活とのつながりも見えてくるのではないかと考える。

以上を鑑み、本時を、探究型から、問題解決型に改善したい(表4)。しかし、実際の授業で行われていた、資料読解やクラス討議の話し合いの活動部分や、ノート記述による表現力の育成は、本時の意義として残しておきたい。したがって、導入部で、地方紙と全国紙の比較により、国民の情報ニーズに応えようとする、新聞に共通の役割があることを掴ませる。しかし、それでは地方紙としての存在意義が見えてこないということを出発点に、どうすれば地方紙の独自性が出るのか?という問題意識を持たせる。そして、この課題に対して解決案を予想させ、資料調査等を踏まえて子どもたちに解決策を見つけさせ、それをクラス全体共有させることで、子どもたちの知識も発展するのではないかと考える。

本時の授業の基本構造が、探究型であっても、子どもたちがそのねらいを達成し、レベル3の知識を形成することができるには、問題解決型の授業に組み立て、新聞社の一員という、当事者性をもたせることが必要であろう。

4. 結語

本研究を総括すると、次の2つの特質にまとめられる。

①社会科授業研究に、教科の構造(目標-内容-方法の三角関係)を持ち込み、授業の構造的・整合性・正当性を条件にして、授業の分析から改善への授業研究を試みたこと。

②小学校社会科授業研究に関して、プロトコルを用いて子どもたちの具体的な思考に注目するとともに、そこから「概念的枠組み」と「知識の構造図」でみられる授業の構成を見直すことで、子どもの学びの過程に即した授業改善ができるようにしたこと。

本研究の意義の第1は、新しい授業改善方法として4ステップ6活動を提案できたことである。そもそも、各社会科授業には、授業(単元)の過程に即した構成(各単位ごとの構成)とその連続体としての構造を持っている。これを「概念的枠組み」と「知識の構造図」を用いて、構成と構造を明らかにした。また、プロトコルを分析することで、子どもの思考過程を明示化できることが明らかになった。

意義の第2は、授業研究の目的の転換である。従来の授業研究は文脈を軽視あるいは、子どもの結果のみに注目する傾向があった。しかし、本来の授業研究は、子どもが実際に授業のどこでつまづいたか、学べたかを理解し、そこから構成と構造を変換・創造することが重要なのではないか。本研究は、本来の授業研究のあり方を見直すものになる。

本研究は、今後の社会科授業改善研究の一助になるとともに、社会科授業研究の発展に寄与することになるだろう。

【参考文献】

池野範男(2016)。「カリキュラムの三角構造とその実現」明治図書『社会科教育』, No. 692, pp. 10-13。

池野範男, 田口紘子, 李貞姫, 宇都宮明子(2008)。「小学校歴史授業の分析とその改善—単元「信長・秀吉・家康と天下統一」をもとに—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第二部, 57, pp. 39-48。

岩田一彦(編著)(2009)。「小学校社会科 学習課題の提案と授業設計—習得・活用・探究型授業の展開—」, 明治図書, p. 14。

梅津正美(2013)。「社会科授業研究の有効性を問う—社会科授業研究の教育実践学的方法論の探求—」, 社会系教科教育学会編『社会系教科教育研究』, 25, p. 91。

梅津正美, 原田智仁(編著)(2015)『教育実践学としての社会科授業研究の探求』, 風間書房。

關浩和(2005)。「情報社会に求められる社会科授業—小5単元「わたしたちの生活と情報」の場合—」社会系教科教育学会編『社会系教科教育研究』, 17, pp. 72-79。

關浩和(2012)。「初等社会科授業研究の基盤構築に向けて—仮説推論的な学習方法の提案と授業評価スタンダードの開発—」社会系教科教育学会編『社会系教科教育研究』, 24, pp. 111-112。

全国社会科教育学会編(2001)『社会科教育研究ハンドブック』, 明治図書, pp. 118-133。

服部健一郎(2017)。「社会科の初志をつらぬく会における授業研究・授業分析論の研究—『考える子ども』からの一考察—」社会科の初志をつらぬく会 個を育てる教師のつどい編『考える子ども』, No. 376, pp. 24-31。

松尾奈美(2017)。「子どもたちのつまづきをどう理解し授業を構想するか—よく生きること—」を励

ます子ども理解—」社会科の初志をつらぬく会
個を育てる教師のつどい編『考える子ども』, No.
77, pp. 36-39。

森分孝治(1978).『社会科授業構成の理論と方法』,明治図書, pp. 166-207。

森分孝治(1987).「社会科授業研究入門」広島大学教育学部教育方法改善研究委員会編『教職カリ

キュラムにおける理論と実習の統合に関する実証研究』, pp. 41-86。

森分孝治, 河南一, 河田敦之, 木村博一, 児玉康弘, 棚橋健治, 矢田宇紀(1982).「社会科学的概念学習の授業構成(Ⅲ)—「平安期の時代構造」の教授書試案—」『広島大学教育学部 学部附属共同研究体制研究紀要』, 10, pp.35-46。